

# 泉州国際市民マラソン 第13回大会 2006年(平成18年)

SENSHU INTERNATIONAL CITY MARATHON THE 13th CONVENTIONS



2月19日 日

天候: 曇り  
 気温: 9.5℃  
 参加者数: 2,851人  
 完走者数: 2,223人  
 沿道人数: 23万人



一斉にスタートするランナー

第13回大会は気温9.5度、湿度48%、風速0.7mと好条件の泉州路を2851人がそれぞれの感動的な思いを込めて走り抜いた。登録男子は招待選手で初マラソンの塩塚慎吾(山陽特殊製鋼)が2時間21分23秒で優勝した。途中競り合った宮里康和(信太山自衛隊)は35秒差で2位だった。塩塚は一時トップの中国選手に1分以上差をつけられていたが、冷静な走りを見せ32km付近で抜き去り、初マラソン初優勝に輝いた。一般市民の部は豪州のリビングストーンだった。女子はマラソン姉妹提携しているゴールドコーストマラソンから招待されたヘレン・スタントン(豪州)が2時間52分54秒で初優勝を飾った。登録女子の1位は大阪教育大ACの岡田寿美が後半、粘りの走りを見せて2時間58分09秒でフィニッシュした。

今回は、シドニー五輪銀メダルのリディア・シモン(ルーマニア)と五輪日本代表の犬伏孝行(大塚製薬)の参加で期待されたが共に途中棄権した。期待して待っていた観衆には残念なことであり、今後の招待選手のあり方に課題を残した。

資料について思うこと

記念誌執筆のための資料を整理していたとき、第1回大会を始める準備段階の「趣意書」や会議資料、新聞記事などが出てきた。これに紛れて大会を終えたあとの反省をも含む個人的な「私見」が出てきた。20年前のものであるが、よくぞまあこの大会をやったものだと感心しきりで、それぞれの組織のまとまりの難しさを痛感している内容であった。イベント開催の多岐にわたる難題があれもこれもと泉が湧き出すかのように現れ、深夜日付が変わるまで議論したこともあった。各市町の連合組織を束ねることの労力は計り知れないものであった。しかし、それぞれの組織の中でそれらを整理していく人がいるもので、組織の中では必ずリーダーが存在し、各々は個人の技量の範疇で得意分野が発揮されるものだったのだと思ったのである。つまり個人が自分の自覚に基づいてポジションが決まり作業が進むものだと教えられたのである。まさに、与謝野晶子の

「劫初より つくり営む殿堂に  
われも黄金の釘ひとつ打つ」

の心境であったに違いない。つくり上げる殿堂（泉州国際市民マラソン大会）にそれぞれが苦勞して釘を打つことに励んだものであるが、その「釘」が黄金であったかどうかが問題である。

そこで「私見」であるが、現在の大会が20年前の願望や希望、目標に近づき、多くの部分で解消されていることに驚いている。

2006年(平成18年)1月31日付朝刊

犬伏、シモンら招待

泉州国際市民マラソン



犬伏



シモン



鶴原

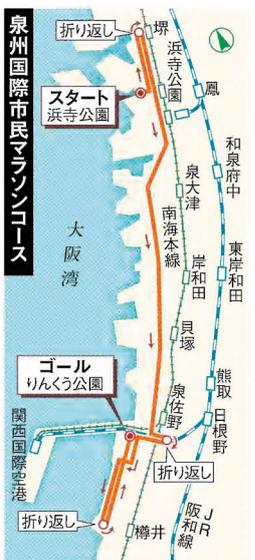
2月19日に行われる泉州(資生堂)ら3人が招待された。犬伏は、大阪国際3位の鶴原、同9位のシモンらがハグレルのレースを完走してくれそう。シドニー五輪女子万有代表の高橋千恵美、美和学園学園長もエンタリしている。大会は午前11時に堺市の浜寺公園をスタート、泉佐野市のりんくう公園をゴールとする42.195キロで行われる。

各種マラソン大会優勝経験者が出場。塩塚博貴、小森智也(ともに山陽特殊製鋼)両選手は初マラソンに挑む。10kmをポストンマラソン優勝の山田敬蔵(松下電器)も元気な姿を見せる。



スタートを待つシモンら招待選手

2006年(平成18年)2月19日付朝刊



シモン選手も市民と走る  
泉州マラソン  
きょうスタート

約3000人の市民ランナーが泉州路を駆け抜ける。りんくう公園を目指す。

当日は午前11時、堺市の浜寺公園をスタートし、府道堺阪南線(旧国道26号)を泉南市の樽井浜口交差点まで南下、ゴールのりんくう公園を目指す。



沿道から力走する選手に応援を送る人ら

「第13回泉州国際市民マラソン」(読売新聞大阪本社、読売テレビなど後援)が19日、堺市から泉南市にかけての42.195キロで開催される。18日には泉佐野市のホテルで開会式が行われ、特別参加のシドニー五輪メタリストのリディア・シモン選手(ルーマニア)や特別招待選手で、昨年の東京国際女子マラソン2位の鶴原清子選手(資生堂)ら約400人が出席した。他の招待選手は、元日本記録保持者の犬伏孝行選手(大塚製薬)やシンガー・ソングライターの高石ともやさん(64)ら。

## 泉州国際市民マラソンに寄せて

高石市長 阪口 伸六



泉州国際市民マラソンが1994年の関西国際空港竣工を記念に開催され、今大会で20回目を迎えられること心からお慶び申し上げます。

いまや、毎年3000人のランナーが早春の寒い中、泉州地域を駆け抜け、「泉州地区の活性化・国際化」と「広域行政の推進」に大きな後押しとなっていますこの一大イベントが、幾多の困難を乗り越え、ここまで回数を重ねることができましたのも、歴代の大会役員をはじめとする本大会開催にご尽力賜りました関係者皆様方のおかげであると改めて深く感謝申し上げます。

昨今、少子高齢社会の到来を迎え、「健康長寿

社会」の構築を目指し、老若男女を問わず筋力づくり、健康増進が求められています。

本市におきましても、「第4次高石市総合計画」を策定し、「市民主体のやさしさと活力あふれる“健幸”のまち」を目標に、国の総合特区にも指定され、「健康づくり教室」やウォーキングロードの整備を推進しており、健康であることが幸福につながる「スマートウェルネスシティ」を進めています。

そういった点からも、幅広い市民参加に重点を置いた同大会の開催意義はより一層重要になってきており、今後30回、50回と益々継続・発展されますことを心よりご祈念申し上げます。

結びになりますが、今後とも本大会の開催にご尽力賜ります関係者皆様方のご健勝とご多幸をご祈念申し上げましてお祝いの言葉といたします。

給水ステーションで頑張るボランティア



市民ランナー最高齢で完走した小松清孝さん

沿道でドリンクを手渡す  
佐野高生徒ら



スタート前 ストレッチで身体をほぐす

